

## 筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩本, 真理 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	<a href="https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006086">https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006086</a>

<b>Title</b>	筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(2)
<b>Author</b>	岩本, 真理
<b>Citation</b>	人文研究. 53 卷 4 号, p.19-31.
<b>Issue Date</b>	2001-12
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 筑波大学図書館蔵『南山考講記』について (2)

岩 本 真 理

### 前稿目次

はじめに

- 1 筑波大学本の構成
- 2 『南山俗語 琉球詞和解』について

### 本稿目次

- 3 漢字の左右両側に付された唐音について
- 4 『南山俗語 琉球詞和解』との比較
- 5 筑波本の唐音表記の特徴について
- 6 その他の特徴
- 7 結論

### 3 漢字の両側に付された唐音について

『南山考講記』、『南山俗語考』のいずれにおいても、唐音の表記は通常、当該漢字の右側に付されている。ところが、『唐話辞書類集』本『南山考講記』には、漢字の左右両側に唐音表記が付されている箇所がある<sup>註1</sup>。『南山俗語考』がそのカナ表記のどちらを選択して載せるのか、あるいは、左右両音を併記した体裁を踏襲しているのかを見ていくことにより、刊本にいたる修訂の過程を窺い知ることができよう。

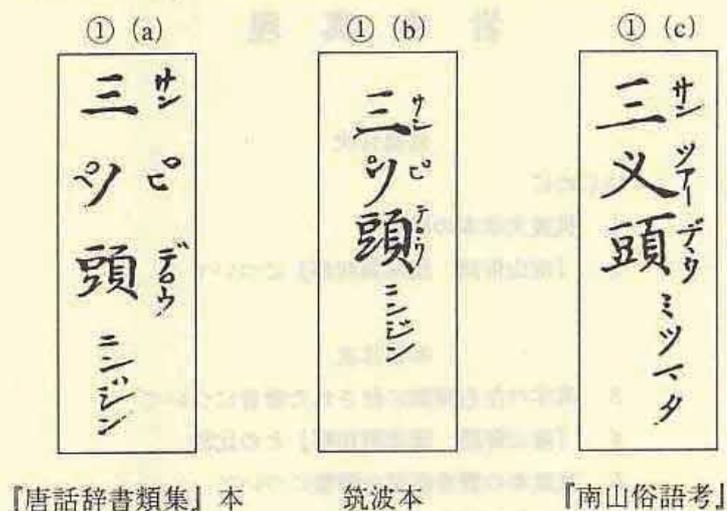
そこで、以下に『唐話辞書類集』本『南山考講記』、筑波本『南山考講記』、『南山俗語考』（鹿児島県立図書館所蔵、特本）の三者の当該箇所の相違点、共通点をあげ分析を加えていくこととする。なお、前稿でも述べた通り、筑波本は本来、天・地・人三冊からなるが、現在人冊は伝わっていないため、人冊内に収録されていたはずの第6、7、8巻（これは『唐話辞書類集』本での pp. 327-492に相当する）が欠けている。したがって、『唐話辞書類集』本のこの範囲内にある左右両側の音表記については、比較がおこなえないため以下の報告からは除外しておく<sup>註2</sup>。

①(a) 『唐話辞書類集』本第1巻p.45:「三ノ頭」(語釈は「ニンジン」<sup>註3</sup>)の「ノ」への表音は、右:「ピ」、左:「ペ」となっている。

(b) 筑波本地冊第4巻17葉：右に「ピ」のみで、左への表音はない。しかし、「ノ」を「必」字かあるいは別字と見て音を記した可能性も否定できない。

(c) 『南山俗語考』第4巻39葉：「三又頭」（語釈は「ミツマタ」）に変わっており、「又」の右側に「ツアー」と表音する。

以下に当該箇所、影印を載せておく。筑波本のこの箇所は、抄写の段階で、「ノ」字になじみのない者が、別字に解釈したゆえに生じたのであろうか。



筑波本の写し手は、「ノ」字に不慣れなばかりか、左側への表音の役割を果たしているカナまでを漢字の一部と誤認して、ともかくも書き取ったかのようなのである。「必」の字にことさらに近づけたともいいがたい微妙な書きぶりである。さて、刊本『南山俗語考』では、当該字を「又」と別字にしている。『南山俗語考』、『唐話辞書類集』本、筑波本のいずれにおいても、この語の二つ後の語に「吃參湯」があがっており、『南山俗語考』のこの場にミツマタが登場するのはいかにも唐突である。医療関係の語彙が集約された箇所でもあるので、これは『南山俗語考』編者による改悪とみなすことができよう。誤写が転じて別の語に改変された事情が、この三者を見比べることで明らかになった。

なお、「ノ」字を含む別の語彙に「ノ出去」（語釈は「ハ子ダス」）があげられる。「ノ」への表音をみると、『唐話辞書類集』本 p.31が右側に「ベ」、『南山俗語考』第3巻51葉も右側に「ベ」、筑波本地冊4巻121葉は「ベン」とする（これは明らかな誤りである）。このほか、「多一ノ」、「少一ノ」、「去一ノ」、「添一ノ」には、いずれの資料でも「ベ」と記されている。結局のところ、「ノ」には「ベ」が優勢をしめ、「三ノ頭」の左右両側に付されていた意義はうすれている。この箇所のみ、二音併記であった理由は今後も検討が必要である。

②(a) 『唐話辞書類集』本第2巻 p.60：「扛了來」（語釈は「相ニナイシテキタ」）の「扛」への表音は、右：「カン」、左：「ゲン」となっている。

(b) 筑波本天冊第2巻26葉：右に「カン」のみで、左への表音はない。

(c)『南山俗語考』第4巻2葉：右側に「カン」

③(a)『唐話辞書類集』本第5巻p.248：「狂風」（語釈は「アガリカゼ」）の「狂」への表音は右側に「キヤン」、左側に「グハン」とする。

(b)筑波本地冊第5巻3葉：右側に「クハン」

(c)『南山俗語考』第1巻3葉：右側に「グワン」

『唐話辞書類集』本では左に付されていた「グハン」を継承し、右側の「キヤン」を斥けたケースといえる。

ちなみに、『四書唐音辨』では、「狂」に対して南京音「クハン」、浙江音「グハン」としている。筑波本が南京音をとり、『南山俗語考』は浙江音をとったと早急に結論を下すのは避けておきたい。なぜなら、筑波本は、原本から書き写す際に、濁点を落とすケースが多いためである。なお、江戸時代のカナ表記において、「ハ」「ワ」が混在していることに関しては小松1985を参照されたい。

④(a)『唐話辞書類集』本第5巻p.272：「製墨」の「製」への表音は右側に「ツウ」、左側に「チイ」とする。なお語釈は「スミ師」である。

(b)筑波本地冊第5巻15葉：右側に「ツウ」、語釈は「スミシメリ」

(c)『南山俗語考』第1巻20葉：右側に「ツイ」と記される。語釈は「スミツクリ」で「人品」内に納められている。

『唐話辞書類集』本内で、「製筆」（第5巻p.271）には「チイ」が、「製薬」（第6巻P.349）には「ツウ」があてられ、不統一が目立つ。『南山俗語考』はそれぞれに、「ツイ」「ツイー」を付してほぼ一貫している。筑波本は「製薬」を取録していないが、「製筆」には「ツウ」をあてており、「製」には「ツウ」の表音で一貫していたとみなせる<sup>14</sup>。ここで語釈の違いに注目すると、筑波本の「スミシメリ」は「スミツクリ」の見誤りか、書き誤りと考えられる。筑波本が写しとる元となった本が、『唐話辞書類集』本の系列とは別のものではなかった可能性が、ここからも示唆される。その時点においてすでに「スミツクリ」という語釈となっていたのではないだろうか<sup>15</sup>。

⑤(a)『唐話辞書類集』本第5巻p.275：「鑑工」（語釈は「フシンプギヤウ」）の「鑑」の右側に「カン」、左側に「ケン」と記す。

(b)筑波本地冊第5巻17葉：右側に「ケン」

(c)『南山俗語考』第1巻22葉：右側に「ケン」

資料(a)の左側の「ケン」を踏襲したことが見て取れるケースである。

⑥(a)『唐話辞書類集』本第5巻p.293：「竹椅」「椅子」の「椅」の右側に「イ、」、左側に「ギイ」とする。

(b)筑波本地冊第5巻26葉：「竹椅」の「椅」の右側に「キイ」、「椅子」の「椅」の右側に「ギイ」とする。

(c)『南山俗語考』第3巻26葉：いずれも右側に「イー」

筑波本は『唐話辞書類集』本の左側に従い、『南山俗語考』は右側に一致する。しかし、「椅」に「ギイ」を付すのは「奇」と見誤ったか、「奇」音の類推からきた誤りと考えられるが、この点は次節においてさらに言及する。

さて、ここで①から⑥のケースをふりかえると、①は誤写の引き起こした稀な例であろう。⑥は未整理なまま筑波本に継承された例ととれる。②③④⑤は、稿本段階の未整理な状況から、一貫性のある表音をめざした改訂作業をあとづける根拠として提示できよう。

#### 4 『南山俗語 琉球詞和解』との比較

前稿第2節において、『唐話辞書類集』本第5巻に相当する別本として、『南山俗語 琉球詞和解』があることを述べた。現在閲覧できているものは、琉球大学附属図書館伊波文庫本（以下、伊波文庫本とよぶ）と、内閣文庫文鳳堂雜纂第三十冊『琉客談記』内に収められているもの（以下、内閣文庫本とよぶ）の二種である。

前稿では、この二種の資料が「令祖」の語釈を正しく伝えていることと、内閣文庫本の中のカナ表記に書き直しとみなしうる箇所が、わずかながらあることを報告した。本稿では、前節で検討を加えた左右両側の表音が、この二資料においてどのように扱われているかを見比べていくこととする。検討箇所は『唐話辞書類集』本第5巻内に相当する部分であるので、前節の③④⑤⑥の4点が、該当箇所となる。

まず伊波文庫本であるが、③④⑤の左右両側への表音は『唐話辞書類集』本と全く一致している。⑤の語釈が「フシンプギヤウ」でなく、「フシンプギヤフ」という表記になっている点は異なるが、③④は語釈も一致する。唯一、⑥は、『唐話辞書類集』本の表音と左右が逆になっており、「椅」の右側に「ギイ」、左側に「イ、」と記している。右側の「ギイ」は他の字よりもかなり太く、初めに「イ、」と記していたものの上に、新たに「ギイ」を書き加えたともとれるやや異様な字である。このことから推測するに、伊波文庫本の写し手は、ほぼ忠実に『唐話辞書類集』本の系列の原本を抄写しつつも、「椅」の右側に「イ、」を付すことには抵抗を覚えて書き直したのであろうか。これは筑波本で「キイ」（あるいは「ギイ」）のみを載せていたこととあわせて検討すべき事項となろう。「椅」の字を含む語には、この他に「椅楠」（語釈は「キヤラ」）があり（『唐話辞書類集』本第5巻p.316）、「ギイ ナン」と表音されている。当該箇所は、筑波本、伊波本、内閣本ではいずれも、「椅楠」と記され「ギイ ナン」となっているが、『南山俗語考』第3巻37葉は「奇楠」に改めている。刊本となる前の段階では、「椅」字の木扁を無視しているかのような付音の態度ではある。

しかし、「椅」を含む別の語にあたってみると、「聞椅楠」がある。『唐話辞書類集』本第4巻p.200、筑波本天冊3巻8葉、そして沖縄県立図書館所蔵本10葉では「椅」を用い、「ウ

エン ギイ ナン」と表音し語釈を「コウヲキク」とする。『南山俗語考』第2巻33葉においても「聞椅楠」のままで収録されており、「聞奇楠」とはしていない<sup>注6</sup>。刊本に到るまでの改訂作業に、不徹底な面があったことを露呈している。

次に内閣文庫本の検討にうつる。③の「狂」の右に「キヤン」を載せるだけで左には別音を載せていない。④の「製」への表音も右側に「ツウ」とするのみである。⑤の「鑑」の右側には「カン」、左側には「ケン」と記し、語釈も「フシンプギヤウ」としており、この箇所は表音、語釈とも『唐話辞書類集』本と一致する。⑥「椅」の右側に「ギイ」と記し、左には別音を載せない。内閣文庫本は⑤を除いて、右側にのみ表音を載せ、しかも『唐話辞書類集』本の右側の音と一致していることがわかる。

以上の検討結果から『唐話辞書類集』本、伊波文庫本、内閣文庫本の成立時期に関して考察を加えなければならないところであるが、もう一箇所、検討対象とすべきところを提示しておきたい。『唐話辞書類集』本第5巻内で左右に表音があるのは、③④⑤⑥であったが、伊波文庫本、内閣文庫本、そして筑波本には、さらに一箇所、両音併記された箇所がある。以下に、前節にならない、⑦としてあげておく。

⑦(a)『唐話辞書類集』本第5巻p.317:「籛兒」(語釈は「ワク」)の「籛」の右側に「ヨ」と表音する。左側への表音はない。

(b) 筑波本地冊第5巻37葉:右に「ヨ」、左に「ヤ」と付す。両者の墨色が同じであることは現本によって確認している。

(c)『南山俗語考』第3巻38葉:右側に「ヨ」と記し、「寶貨器用服飾香奩玩具」の項目内に収める。

(d) 伊波文庫本37葉:右に「ヨ」、左に「ヤ」と記す。コピー資料の閲覧によるため墨色の判断はできかねる。

(e) 内閣文庫本:右に「ヨ」、左に「ヤ」と記す。コピー資料の閲覧によるため墨色の判断はできかねる。

さて、「籛」字は、『四書唐音辨』に収録されていないが、近似音とみなしうる「藥」、「躍」、「籛」には右(南京音)に「ヨツ」、左(浙江音)に「ヤツ」と付音されている<sup>注7</sup>。

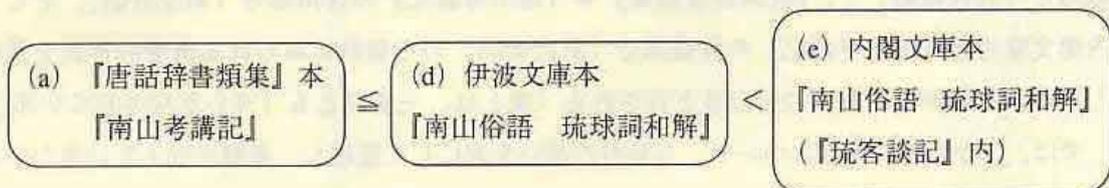
ちなみに、拙稿1991、1992、1993では、『南山俗語考』(鹿児島県立図書館所蔵 特本)付録部分「長短雑話」と、『唐話辞書類集』本『南山考講記』の付録部分「君臣唐話」、そして内閣文庫所蔵『南山考講記』の付録部分「君臣唐話」の三資料にみられる唐音の差異を指摘したが、その中で「籛」の近似音と目される「藥」は、三資料とも「ヨ」と付されている。

では、①から⑥の箇所について、五資料の違いを表にして整理し、考察を加えていきたい。

	(a) 『唐話辞書類集』本	(b) 筑波本	(c) 『南山俗語考』	(d) 伊波文庫本	(e) 内閣文庫本
①ノ	右：ピ 左：ベ	ピ	「又」ツアー	なし	なし
②扨	右：カン 左：ゲン	カン	カン	なし	なし
③狂	右：キヤン 左：グハン	クハン	グハン	右：キヤン 左：グハン	キヤン
④製	右：ツウ 左：チイ	ツウ	ツイ	右：ツウ 左：チイ	ツウ
⑤鑑	右：カン 左：ケン	ケン	ケン	右：カン 左：ケン	右：カン 左：ケン
⑥椅	右：イ、 左：ギイ	キイ／ギイ	イー	右：ギイ 左：イ、	ギイ
⑦籊	ヨ	右：ヨ 左：ヤ	ヨ	右：ヨ 左：ヤ	右：ヨ 左：ヤ

『唐話辞書類集』本と伊波文庫本は極めて近い時期に成立していたと考えられるのではないか。⑥の違いから判断するに、『唐話辞書類集』本を先とするほうが、合理的であろう。先述したとおり、伊波文庫本のこの箇所の右側は、「イ、」を「ギイ」に書き直した疑いがある。『唐話辞書類集』本を先とみなしておくことで、この点は理解しやすくなるが、唯一の破綻は『唐話辞書類集』本が⑦で両音並記を欠いていることである。『唐話辞書類集』本が、原本から写し取る際に、左側を書き漏らしたという解釈も可能ではある。

一方、内閣文庫本は『琉客談記』内の一部分に収録されたものであるので、正確にカナ表記を写す必要性がなかったとも考えられよう。③④⑥では伊波文庫本の右側の表記を踏襲し、⑤、⑦で両音併記を残している。伊波文庫本より後に成立したとみるのが妥当である。以上を整理すると、この三資料の成立時期の順については、次のような推測が可能である。



仮に、この流れが概ね正しいものであったとしても、『唐話辞書類集』本そのものを、原本として書き写したことを意味するのではない。この系列の写本が受け継がれたことを意味する

だけである。『南山考講記』が写本段階で一部に流布していた点は拙稿1989で言及したとおりである。島津重豪は跋でこれを自らの備忘録と述べてはいるものの、むしろ積極的に写本を世に送り出していたのではないか。沖縄県立図書館の『南山考講記』はそれを示す一つの例である。同時期に同系列の写本が広まっていくなかで、微細な点での語釈の訂正や、カナ表音に変更などの手が加わるのは無理からぬことである。『南山俗語 琉球詞和解』という書名の由来や成立の背景には解明すべき点が残っているが、これらが『南山考講記』第5巻の写本の系列であることは疑いようがなく、むしろ忠実に写し取ることに主要な力点があり、抜本的な改訂や大幅な修訂をめざしたものではないことは明らかである。

一方、筑波本は、上掲の表からも明らかなように、左右の両音併記は一箇所を除いて避けられ、カナによる唐音表記においても『南山俗語考』に近い傾向がうかがえる。次節では、二音併記の箇所からはなれ、資料の全般にみられる唐音表記の特徴を整理しておく。

## 5 筑波本の唐音表記の特徴について

拙稿1991、1992、1993は、『唐話辞書類集』本『南山考講記』の付録部分と特本『南山俗語考』の付録部分にみえるカナによる唐音表記を整理して、分析を加えた。表記上のゆれが散見しているが、全般的な傾向として、写本と刊本の間でみられる違いは、単なる訛音の訂正という面にとどまらず、校訂者自身の依拠した音系、あるいは依拠することを意図した音系へと意識的に変更されたと考えられる。内閣文庫所蔵の手稿本『君臣唐話』は改訂作業途上の産物であった可能性があり、また、それへの書き込みも貴重な資料といえるのである。

本稿では、これを受け、『唐話辞書類集』本『南山考講記』、筑波本『南山考講記』、『南山俗語考』(鹿児島県立図書館所蔵 特本)の三資料にみえる唐音表記の特徴について報告する。

なお、あらかじめ断っておかねばならないこととして、次の二点があげられる。

1. 拙稿1991、1992、1993は付録部分の「長短雑話」、「君臣唐話」だけを対象にしており、本編部分の唐音との体系的な比較は未だにおこなっていないこと。
2. 今回扱った三資料においても、同一資料、同一巻内での表記のゆれがあり、不統一な記述が散見し、ことに筑波本は誤記や記入漏れも多く、信頼度が落ちること。

以上のような限界があり、精密な比較はかなり困難だが、拙稿1993で指摘したいくつかの特徴を中心にして、簡単な報告だけをしておきたい。

- (1) 長音の表記：『南山俗語考』「ー」、『唐話辞書類集』本、筑波本「ゝ」  
例：「五」『南山俗語考』「ウー」、『唐話辞書類集』本、筑波本「ウゝ」
- (2) 二重母音のワリ符号：『南山俗語考』は多用するが、『唐話辞書類集』本、筑波本は使用が少ない。  
例：「碎」『南山俗語考』「ス〇イ」、『唐話辞書類集』本、筑波本「スイ」

(3) 山摂合口呼、蟹摂合口呼などでの介母 [-w] の表記：『南山俗語考』、筑波本は「ワ」、  
『唐話辞書類集』本は「ハ」をよく用いる。

例：「管」『南山俗語考』、筑波本「クワン」、『唐話辞書類集』本「クハン」

「快」『南山俗語考』、筑波本「クワイ」、『唐話辞書類集』本「クハイ」

(4) 心母、書母系列への表音：『南山俗語考』は両者を区別するが、『唐話辞書類集』本、筑波本は両者を区別しない。

例：「小」（心母）『南山俗語考』、『唐話辞書類集』本、筑波本「スヤ〇ウ」

「少」（書母）『南山俗語考』「シヤ〇ウ」、『唐話辞書類集』本、筑波本「スヤ〇ウ」

ただし、以下のような例もある。

「焼」（書母）『南山俗語考』、『唐話辞書類集』本、筑波本「シヤ〇ウ」<sup>注8</sup>

(5) 初母、精母系列への表音：『南山俗語考』はどちらにも「ツア」を用いる。『唐話辞書類集』本、筑波本は「ツア」、「サ」、「サ°」が入りまじる。

例：「挿」『南山俗語考』「ツア」、『唐話辞書類集』本「サ」、筑波本「ツア/ツア」

ところが、同じく初母に属する「察」に対しては『唐話辞書類集』本、筑波本の表記はほぼ逆になる。

「察」『南山俗語考』「ツア」、『唐話辞書類集』本「ツア・」、筑波本「サア」

また、初母と同系列の莊母に属する「札」、「蓋」は次のように付音されており、『唐話辞書類集』本、筑波本の一貫性のなさがうかがえる。

「札」『南山俗語考』「ツア」、『唐話辞書類集』本「ツアー」、筑波本「サ°ー」

「蓋」『南山俗語考』「ツアン」、『唐話辞書類集』本「ツアン」、筑波本「サ°ン」

次に、精母の系列の比較をおこなう。

例：「再」『南山俗語考』、『唐話辞書類集』本、筑波本いずれも「ツアイ」

「賛」『南山俗語考』「ツアン」、『唐話辞書類集』本「サン」、筑波本「ザン」

「竈」『南山俗語考』「ツア〇ウ」、『唐話辞書類集』本「サ°〇ウ」、筑波本「ツア〇ウ」<sup>注9</sup>

ところが同系列の從母の「糟」に対しては「竈」と逆のタイプの表記がみられる。

「糟」『南山俗語考』「ツア〇ウ」、『唐話辞書類集』本「ツア〇ウ」、筑波本「サ°〇ウ」

初母系列と同様に『唐話辞書類集』本、筑波本の不統一がめだつ。拙稿1993で報告したように内閣文庫本「君臣唐話」は『唐話辞書類集』本の「サ」の表記を「ツア」に改めており、『南山俗語考』に近い傾向がみられた。筑波本には、これに匹敵するような一貫性が欠けている。なお「サ°」の表記は『唐話纂要』にも頻繁に現れるが、小林1985 p.47によれば、江戸洒落本の中にも tsa を表すために「サ°」「さ°」を用いた例があるという。筑波本の写し手が「サ°」と「ツア」の混在に抵抗を覚えなかった背景の一つであるとも考えられる。さらに加えるならば、初母、精母系の発音の違いを反映させるべく「サ°」、「ツア」を使いわけたのではないのであり、實際上、初母、精母系に発音の相違はなかったとみなされる<sup>注10</sup>。

(6) 匣母系列への表音：『四書唐音辨』の「南京音」と「浙江音」の違いは、匣母系において明確に現れる。拙稿1993ですでに報告したが、『唐話辞書類集』本と『唐話纂要』は「南京音」に従う傾向があり、『南山俗語考』は「浙江音」に近く、内閣文庫所蔵「君臣唐話」はその両面を備えていた。ただし、これは資料全体を対象とした調査ではなく、付録部分である「君臣唐話」、「長短雑話」内での傾向であって、資料の全般的な傾向と一致するとは限らない。今回調査対象となった三資料にみえる匣母系列の字への表音を以下にあげる。

例：「下」『南山俗語考』、『唐話辞書類集』本、筑波本「ヒヤア」<sup>111</sup>

「狎」『南山俗語考』「ヤ」、『唐話辞書類集』本「ハ」、筑波本「ヤ」

「豪」『南山俗語考』「ア○ウ」、『唐話辞書類集』本「ハ○ウ」、筑波本「ア○ウ」

「行」『南山俗語考』「ヒン」、『唐話辞書類集』本「イン」、筑波本「ヒン」

「下」、「豪」、「行」について『四書唐音辨』では次のように区別されている。

「下」南京音「ヒヤア」：浙江音「ヤア」

「豪」南京音「ハ○ウ」：浙江音「ア○ウ」

「行」南京音「ヒン」：浙江音「イン」

『南山俗語考』、筑波本では「下」と「狎」が一致していない。舒声と入声の違いがあるとはいえ、類似した音であるはずの二字に異なる表音をしているのは、ちょうど『南山俗語考』の「長短雑話」内で同音であるはずの「下」と「夏」に「ヒヤア」、「ヤア」と付音していたことと通ずる現象であろう<sup>112</sup>。以上の点から『南山俗語考』内に「南京音」と「浙江音」が混在していることがわかる。また、「豪」には「浙江音」、「行」には「南京音」を付し、ここでも矛盾をみせる。筑波本はどちらも『南山俗語考』と同じ表音となっており、『唐話辞書類集』本とは一致しない。筑波本は『唐話辞書類集』本とは異なる表音を意識的にめざしたのだろうか。これまでに述べた表音の特徴(1)から(6)の内、筑波本は少なくとも(3)(6)においては、『南山俗語考』に近い側面をみせている。

(7) 尖音表記について：韻母の特徴の中で際立つ点は、『唐話辞書類集』本が細音を表記にあまり反映させないのに対して、『南山俗語考』と筑波本は明示する傾向にあることである。

例：「清」『南山俗語考』「ツイン」、『唐話辞書類集』本「チン」、筑波本「ツイン」

(8) 山撮合口呼で唇音を声母にもつ字に対する表音：『南山俗語考』と筑波本はほぼ一致し、『唐話辞書類集』本だけが異なる。

例：「盤」『南山俗語考』「ボワン」、『唐話辞書類集』本「バン」、筑波本「ボハン／バン／バン」

「伴」『南山俗語考』「ボワン／ボワン」、『唐話辞書類集』本「バン」、筑波本「ボハン」

「拌」『南山俗語考』「ボワン」、『唐話辞書類集』本「バン」、筑波本「ボアン」

以上の(1)から(8)の内、筑波本が明らかに『南山俗語考』よりも傾斜した特徴をもっているのは、(3)(6)(7)(8)の四点である。このほかに頻用される「不」、「没」への表音にも特徴がある。

「不」『南山俗語考』「ボ」、『唐話辞書類集』本「プ/（まれに）ボ」、筑波本「プ/ボ」  
 「没」『南山俗語考』「ム」、『唐話辞書類集』本「モ」、筑波本「メ°/モ」  
 「不」は『唐話辞書類集』で「プ」と表記された箇所では筑波本が「ボ」としていたり、あるいは逆のケースもみられる。「没」の表音は筑波本が独自に「メ°」を頻用している点で眼をひく。「没」の表音は筑波本が独自に「メ°」を頻用している点が特徴的である。

さて、拙稿1993は、唐音のカナ表記の特徴から内閣文庫所蔵「君臣唐話」を『南山考講記』から『南山俗語考』への改編途上の産物ではないかとの推定をおこなったが、今回の調査によって、筑波本は内閣文庫所蔵「君臣唐話」に似た側面をもつことが明らかとなった。もちろん全ての唐音のカナ表記の特徴が「君臣唐話」と一致するものではないので、同一の校訂者の手によるとまでは断言しかねるが、ある志向性をもって、『南山俗語考』のカナ表記に手を加えたものが写本としてすでに成立していたと推測する。「君臣唐話」はその写本の流れを汲むものであり、筑波本はその写本の一つをかなり乱雑に写し取ったものとみなすのが妥当と思われる。

## 6 その他の特徴

筑波本にはカナ表記以外にも、いくつかの特徴を指摘できる。

一つの特徴として、六字や八字といった多字フレーズが見出し語となる場合に、しばしば、しかるべき意味の切れ目に「。」を加えわかりやすくしている点である。これは『唐話辞書類集』本にはなかった表記であり、『南山俗語考』もこのような表記はない。例えば、「既如此。就不妨」（天冊第2巻4葉）、「栗子熟了。自己脱了肉」（天冊第3巻22葉）のように切れ目を墨で表示する。しかし中には、点をつける位置を誤った例もある。『唐話辞書類集』本（第1巻p.86）には点なしで「你臉皮厚正真好臉皮」となっている箇所を、筑波本天冊第2巻11葉は「你臉皮。厚正直。好臉皮」とする。三字ごとに切れ目がある場合が多いため、それに従ったのであろう。六字めの「直」は「眞」の誤りである。意味の切れ目からすると、「你臉皮厚。正真好臉皮」と四字めで切るべきもので、そうであってこそ語釈の「ソチノツラノカワハアツイヨイツラデ」に対応する。筑波本の語釈は「ソチノツラノカワハアツイヨイツラタ」であり、「你臉皮厚。正真好臉皮」に対するものである。「你臉皮。厚正直。好臉皮」という誤りは、筑波本の写し手が多字フレーズに遭遇した際に、三字ごとに切って理解する習慣が身についていたため生じたものであろう。

次に語彙の配列という面にふれておきたい。

まず、一葉内での体裁から述べると、『唐話辞書類集』本、筑波本、『南山俗語考』のいずれであっても、ほとんどの葉において、上中下の三段に、それぞれ三字の語あるいはフレーズが配されるのが原則である。四字以上の多字のフレーズが混じった時に、筑波本は上段中段をそ

れにあて、下段に三字の語を配する傾向がある。『唐話辞書類集』本や『南山俗語考』にはそのような傾向はない。筑波本は使用者にとっての使いやすさや、見やすさを配慮したのだろうか。次のケースをその例として検証しておきたい。『唐話辞書類集』本では第5巻のように分類項目が明記されて配列した巻以外では、同一巻内で語彙の意味的関連性の薄いグループに移る際にも改行されず、連続的に配置される。しかし、筑波本では、同一の意味グループから別のグループに入る箇所に、改行を加えていることがある。例えば、天冊第2巻6葉で「都是 罷了 完了 還是」の後、改行をして、「有許趣 大有趣 大有興」と続く。『唐話辞書類集』本では第2巻p.70に、改行することなく「都是 総是 罷了 完了 還是 有許趣 大有趣 大有興」が連なって載せられている（筑波本では「総是」が脱落していることがわかる）。これらが刊本『南山俗語考』でどう扱われているかをみると、興味深いことに「都是 罷了 完了 還是」は第2巻19葉の「通用言語」に、「有許趣 大有趣 大有興」は第3巻9葉の「筵宴飲饌」に収録されている。他にも同様の箇所があり、改行が、意味の疎遠さを示すマークのように機能しているといつてよからう。

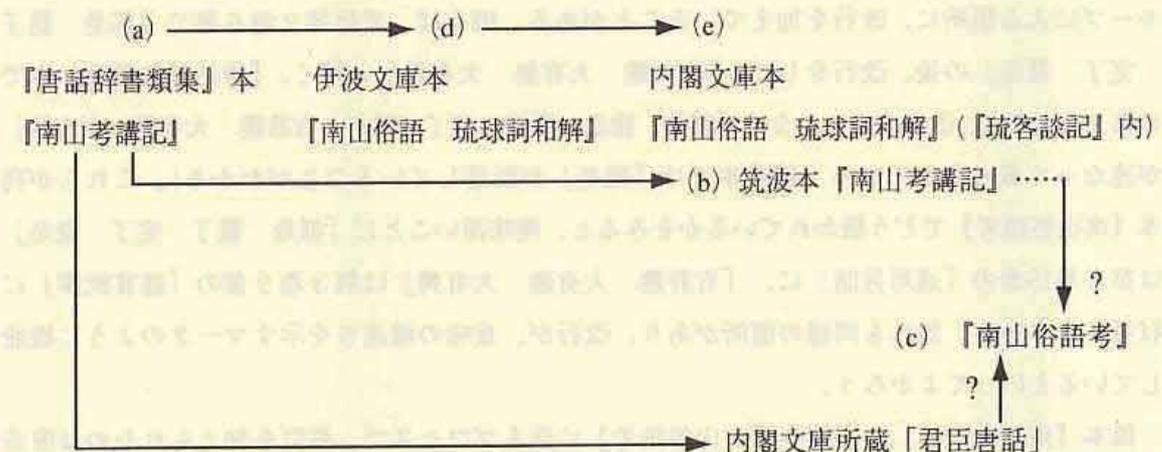
稿本『南山考講記』から刊本『南山俗語考』に到るプロセスで、修訂を加えられたのは唐音だけでない。語彙の項目別分類にも膨大な時間を費やしたことが想像できる。筑波本にみられる「改行」という手段は、極めてささやかではあるが、意味による分類への芽生えととらえておきたい。

ついでながら、『唐話辞書類集』本と筑波本では全般的に配列の不一致が散見する。筑波本がうっかり書き漏らし、後からそれに気づいて書き加えたために、配列順にずれが生じたと解釈できる。しかし、項目で分類された巻、つまり、『唐話辞書類集』本第5巻、筑波本地冊第5巻では、「天文時令地理」、「人品」といった項目ごとに整理されているため、配列上『唐話辞書類集』本と筑波本で大きな差はみられない。この点も意味分類による配列方式が、筆写する者、ひいては使用する者にとっても有益であることを示唆していよう。

## 7 結論

さて、前稿と本稿で筑波本『南山考講記』について、その体裁、唐音表記、配列という側面から検討を加えてきた。筑波本が粗雑な写本であることは、一見して明らかだが、唐音表記からは部分的に『南山俗語考』に近い特徴が見いだされる。これは内閣文庫所蔵「君臣唐話」にも通じる側面であった。また配列上の工夫がわずかながらみられることは、語彙の配置を合理的なものに改めていく第一歩であった可能性がある。もちろん、この資料の筆写者が、『南山俗語考』を完成させる作業に携わった校訂者自身であったと主張するものではない。同じ『南山考講記』という書名を冠しつつも、『唐話辞書類集』本とは異なる本が存在していたこと自体が、とりわけ意義深く思われる。下の図の(a)(d)(e)には積極的に改訂を試みたような形跡

がないのに対し、内閣文庫所蔵「君臣唐話」や筑波本には明らかな改編の意図が読みとれる。この二資料が改編作業途上の資料そのものであると断言するのは難しいが、改訂段階の写本をさらに書写したものが現在に伝えられたと考えておきたい。この二資料の成立の順や、影響関係の有無などは、今のところ不明であり、判断は保留しておく。



付記 資料の転載を御快諾いただいた筑波大学附属図書館、汲古書院、鹿児島県立図書館に対して心より御礼申し上げます。

注

- 1 左右両側への表音は、つとに、朝岡春睡「四書唐音辨」（京都大学附属図書館蔵）にもみられる。この書は、享保5年に成書し、享保7年の刊本であることが奥書からわかる。漢字の右側には「南京音」を、左側には「浙江音」を載せる。「南京音」と「浙江音」に差異がない場合には、右側にのみ表音する体裁で一貫している。また、高松1985aに指摘されているとおり、「龜幼略記」（現在、汲古書院「唐話辞書類集」第16集に収録）は、右側に「南京音」、左側に「福州音」をあげる。「南山考講記」が部分的に左右両音併記という方式を採用した意図が「南京音」と「浙江音」の併用にあったのか、あるいは左右のカナ表記の特徴は果たして「南京音」と「浙江音」とよびうるものなのか、この二点はさらなる検討が必要である。前稿でも指摘したが、「唐話辞書類集」本は影印本ゆえに、左右両音の墨色の差は読みとれない。「長澤本」原本を実見できれば、左側の表音が後から補助的に加えられたものかどうかは明白になる可能性がある。
- 2 ちなみに、「唐話辞書類集」本内の、仮に6、7、8巻とされている pp.327-492に左右の表音が付されている箇所は5箇所である。
- 3 「三ノ頭」に、「ニンジン」の語釈があてられていることについて、推測を述べておく。高麗人夢の「夢」の字の下半分には「多」（さんづくり）があり、これは、右上から左下に向かう「はね」（つまり「ノ」）が三つ重なって構成されている。ゆえに「ニンジン」は「三ノ頭」との別称を得たものと解しておく。厳密には「頭」という語からすると字の上半分に、相当するような筆画が並ぶことが期待されるのだが、ここではこれ以上詮索しない。

- 4 「製薬」は筑波本の入冊内に収められていたと思われる。
- 5 ついでながら、「製筆」の語釈は、『唐話辞書類集』本、筑波本のいずれも「フデシ」であり、『南山俗語考』の「フデユヒ」とは異なる。語釈についても何度かの改訂が施されたことを示す例といえよう。
- 6 『南山俗語考』の語釈は「カウヲキク」と表記されている。
- 7 「薬」、「躍」、「籥」の中古音は宕摂、開口三等、入声、以灼の切である。一方、「籥」は宕摂、合口三等、入声、王縛の切であり、開合の差はあるが近似音ととらえておく。
- 8 筑波本は「焼」に対して「セウ」、「スヤ〇ウ」、「シヤ〇ウ」、「シヤウ」、「シアウ」、「キヤ〇ウ」とゆれが激しい。最後の「キヤ〇ウ」は「曉」か「澆」と見誤って音を付したものと思われる。
- 9 『唐話辞書類集』本、筑波本では「竈」を用いず、俗字を使用している。ついでながら『四書唐音辨』は「竈」の右側に「サ<sup>°</sup>〇ウ」とのみ記しており、『唐話辞書類集』本と一致する。
- 10 矢放1981を参照されたい。なお、表記の混乱は『四書唐音辨』にもみられる。「在」(従母)の右に「サ<sup>°</sup>イ」、左に「ツアイ」と載せながら、「在」(従母)と同音であることが期待される「材」には右に「ツ<sup>°</sup>アイ」、左に「ザイ」と付している。右が「南京音」を、左が「浙江音」を反映するはずなのだが、現実にはどれほどの差異が意識されていたのかははっきりとしない。果たして「サ<sup>°</sup>イ」と「ツ<sup>°</sup>アイ」が同音、「ツアイ」と「ザイ」が同音の表記という解釈で矛盾をきたさないのか、さらに検証する必要がある。ちなみに「再」(精母)には右に「サ<sup>°</sup>イ」とのみ載せ他の表記はない。
- 11 筑波本にみえる「下」への表音は他に「ヒヤウ」、「ヒア」がある。
- 12 拙稿1993で指摘している。

## 参考文献

- 岩本真理1989 「『南山俗語考』のことば」『鹿兒島経大論集』30巻1号 pp.81-107
- 同 上1991 「『南山俗語考』の唐音について(1)」『人文研究』43巻11分冊 pp.1-27
- 同 上1992 「『南山俗語考』の唐音について(2)」『人文研究』44巻5分冊 pp.1-34
- 同 上1993 「『南山俗語考』の唐音について(3)」『人文研究』45巻5分冊 pp.1-30
- 同 上2000 「筑波大学図書館蔵『南山考講記』について(1)」『人文研究』52巻4分冊 pp.1-12
- 岡島昭浩1988 「近世唐音の重層性」『語文研究』(九州大学国語国文学会)63号 pp.36-50
- 小松寿雄1985 『江戸時代の国語—江戸語その形成と階層—』(国語学叢書7)東京堂出版
- 高松政雄1984 「近世的唐音—破擦音を中心として—」『岐阜大学研究報告人文科第32巻 pp.172-185
- 同 上1985a 「近世唐音弁—南京音と浙江音—」『国語国文学』(岐阜大学)17号 pp.92-110
- 同 上1985b 「近世的唐音の音体系—江南浙北音としての—」『国語国文』54巻7号 pp.20-39
- 同 上1986a 「近世的唐音の音体系—その二、韻母の面よりの考察—」『国語国文』55巻6号 pp.9-19
- 矢放昭文1981 「『南山俗語考』初探」『鹿兒島経大論集』23巻1号 pp.67-84
- 林 武實1988 「岡嶋冠山著『唐話纂要』の音系」『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所 pp.173-205